

芦屋町の 特別支援教育

▷問い合わせ 学校教育係
(☎223・3547)

芦屋町では、一人ひとりに
合った特別支援教育のさらなる
推進に取り組んでいます。

小中学校の特別支援学級を
紹介します。



令和4年度 特別支援学級

山鹿小学校	芦屋小学校	芦屋東小学校	芦屋中学校
知的学級	知的学級	知的学級	知的学級
情緒学級	情緒学級	情緒学級	情緒学級
*****	難聴学級	*****	*****

★芦屋町の 特別支援教育の特色です

- すくすく発達相談
- 巡回相談

町では、臨床心理士が直接、幼稚園・保育所や小中学校を訪問し、生活場面や授業中などの子どもの様子を観察し、その子に必要な支援の内容や方法を保育士や教員に助言しています。これらの相談をとおして、すべての子どもが長期にわたる継続した支援を受けることができます。

また、保護者も「すくすく発達相談」や「巡回相談」を活用して、臨床心理士に相談をすることができます。

●通級指導教室

通級指導教室では、読み書きに時間がかかったり、友だちとのコミュニケーションがうまく取れなかったりするなど、学習面や行動面、対人面などで困りごとを抱えている子どもに対し、一人ひとりの状況に応じた指導を行います。子どもは通常学級のクラスに籍を置いているため、学校生活のほとんどは通常学級で過ごしますが、週に1～数時間を通級による指導の時間として通級指導教室に移動し、それぞれの困りごとや課題に合わせた支援・指導を受けます。

町内3小学校の通級指導は、芦屋東小学校に在席している教員がすべて担当しています。そして、子どもが在籍するそれぞれの小学校で通級指導を受けることもできます。芦屋中学校にも通級指導教室があり、担当する教員がいます。

もし、子どもが学校生活での困りごとを抱えていたら、学校や教育委員会まで気軽に相談してください。



みんなで食べたらいっぱいね

食育とは、さまざまな経験を通じて、食に関する知識と、バランスの良い食を選択する力を身に付け、健全な食生活を実践できる力を育むことです。食育することは生涯にわたって続く基本的な営みであり、子どもはもちろん、大人になってからも食育は重要です。

そこで今回は「共食」を紹介し、共食とは、みんなで一緒に食卓を囲んで、共に食育を言います。共食には、「一緒に食育することだけでなく、「何を作ろうか」と話し合ったり、一緒に料理を作ったり、食事の後に「おいしかったね」と語り合ったりすることも含まれます。

何人かで食卓を囲む食育の場は、コミュニケーションの場でもあります。しかし、最近は核家族化やライフスタイルの多様化などによって、

家族みんなが集まって食事をする機会が減っています。ある調査では、小学生の約5人に1人、中学生の3人に1人が朝ごはんを1人で食べていると報告されており、1人で食べる子どもは、心や体の不調を感じる割合が多いようです。

子どもがいる家庭では、家族みんなで一緒に食卓を囲むことによって、食事の楽しさを実感することができ、また、箸の正しい持ち方や食事のマナー、「いただきます」「ごちそうさま」といった食事のあいさつ、栄養のバランスを考えて食べる習慣や食べ物や季節の料理といった食の文化などを、親や祖父母から子どもに伝える良い機会にもなります。

なお、近年は新型コロナウイルス感染症の影響もあるため、自らが周囲に感染を拡大させることがないよう、一人ひとりが感染症対策を心がけて共食をすることが重要です。

毎年6月は「食育月間」、毎月19日は「食育の日」です。

食育月間や食育の日を機会に、日頃の食生活を見直したり、家族そろって楽しく食卓を囲んだり、食育に取り組んでみませんか。



リーど通信 No. 45

ボランティア活動センター 令和3年度活動報告

●リーどぼらんていあキッズ

令和3年7月～4年3月に、計6回の研修を行いました。避難所のテントやベッドの組み立て体験とおして災害支援ボランティアを考えた、芦屋海岸のごみ拾いを行ったりして子どもにもできるボランティアを学習しました。



●第1回ワールドカフェ

(令和3年7月24日)

芦屋町社会福祉協議会の職員を招き、被災後に設置される災

問い合わせ
ボランティア活動センタ
ー (☎221-1011)

害ボランティアセンターの概要や業務の説明を受けました。芦屋町で災害が発生した場合に、住民がそれぞれの立場でどのようなボランティアができるのかを考えました。

●クラフトマーケット

(令和4年3月7日～19日)

ボランティア活動センター関係団体が製作した、アクセサリやマスクといった手作り作品の展示・販売を行いました。

●第2回ワールドカフェ

(令和4年3月19日)

リーどぼらんていあキッズが研修として芦屋海岸でのごみ拾い活動を行い、拾ったごみの種類や量、感想を発表しました。参加者にとって、ごみの問題を考える機会となりました。

